

「節目を尊ぶ、人生は旅」

松榮山報



令和二年
春季例大祭齋行

これからの祭典行事案内

夏越 大祓式 ご案内



植物たちに恵みの雨をもたらせる梅雨の最盛期は若葉から新緑、そして深緑へと移りゆく木々の命の輝きがことさら美しく映え、見る者の心さえも浄化させてくれるかのような非常に清らかな季節であると言えます。そして瑞穂の国日本にとっては田を潤す重要な雨の季節でもあります。

生命の常若や自然の営みを感じる六月三十日、宮中をはじめ全国の神社では天下万民の罪穢を祓う夏越大祓式が執り行われます。

当護國神社境内に設えられた瑞々しい茅の輪の緑が鮮やかに映るのもこのお祭りならではの、一般参加の方々共に知らず知らずの間に身につけてしまった年明けから半年間の悪しきことを祓い清めて新たな半年間のスタートとします。

茅の輪くぐりと水盤に浮かべるご自身の人形（ひとがた）で今年前半のさまさまを祓う。美しい四季を持つ日本において神様を敬い日常生活においても常に神様とともに過ごす日本人。日本にいますます神々と緑奥深くにお鎮まりの大神様へご自身の平安を祈る古くからのお祭りです。

日時／令和二年六月三十日(火) 午後三時より
場所／大分縣護國神社神門にて夏越大祓式齋行
茅の輪くぐりのあと本殿にて参拝
初穂料／一世帯三千円
◎事前、当日とも社務所にて受け付けております



みたままつり献灯のお願い

四四四八柱の英霊をお祀りする大分縣護國神社の夏の風物詩であるみたままつり。護國神社ならではの大切なお祭りとしての戦後より灯りの歴史を重ねています。

祖国のため、愛する家族のために尊い命を捧げて国の内外において散華された英霊たち。その御霊をお慰める境内に掲げられた幾千もの御灯は、懐かしいふるさと大分へとお帰りをただいとお盆の道しるべの優しい灯りとして、そして我が国日本が世界にたぐいまれな平和国家であることへの感謝の思いを込めた美しくも意義深い灯りとして、毎夏ご遺族崇敬者もとり、各団体や企業よりお心のこもった献灯をいただいております。

昨今の疫病による災禍に世界中が震撼としていますが、七十五年前の終戦から続くゆるぎない日本の平和への感謝。そしてさらなる平和と各々皆様方の平安を願う私たちがなければなりません。尊い命を犠牲にしてこの国の平和の礎となった英霊への真心こめた慰霊と恒久平和の願い。そして不戦の誓いのお気持ちとして、是非みたままつり献灯にご賛同いただきましたお願い致します。

■小型提灯 (47センチ)
初穂料／一灯 三千円

■大型提灯 (68センチ)
初穂料／一灯 一万円



「お申し込み」
大分縣護國神社
〒870-0925
大分市牧一〇九二
電話／〇九七-五五八-三〇九六(代)
FAX／〇九七-五五八-三〇九八
振替／019504418874
◎振替用紙は神社社務所でも用意しております
お申し込み締め切り／七月三十一日(金)



人事往来
令和二年五月一日付 仕女を命ずる
金丸 茜(写真右)
橋本 螢(写真左)

- 五月 明治大分水路水神祭 並びに物故者慰霊祭 上旬
- 六月 骨董市 十六日・十七日
- 六月 神梅収穫祭 中旬
- 六月 御田植え祭 中旬
- 七月 夏越大祓式 三十日
- 七月 第六十七回 大分市朝顔展 下旬
- 八月 みたままつり 十三日・十四日・十五日
- 八月 みたままつり平和祭 十五日(正午)

これからの祭典行事案内
(ただし情勢により延期や中止となる場合があります)





令和二年 春季例大祭を終えて



大分縣護國神社宮司
八坂 秀史

今年も境内は桜で華やいだ。余寒の風に薄紅色の河津桜が揺れ、サクラ属の代表山桜の白い花が後を追う。戦没者ゆかりの陽光桜が鮮やかな紅を青空に映す頃、優美に枝垂らす桜もあり。純白の染井吉野がその装いを散らすとき、丸くふんわりと牡丹桜が花開き桜花リ

レーの終わりを告げる。初夏は近い。今季の例大祭は桜舞い散るなかを奉仕申し上げた。梢を離れる花弁に御霊も我を重ねられたことではと拝した。世情を鑑み参拝者をお招きしない祭典だったが、悪疫予防のためやむを得なかったとどうかご理解賜りたい。その影響で東京五輪は延期となったが、スポーツの世界では無観客試合となるとアスリート達は競技の良いうねりに乗れないと云われる。競技者と観客が一体となった熱い大きな情熱の塊りがより速い記録、より高度なプレイを導くのだろう。春秋の例大祭も然り。奉仕者と参列者の役割は違えども御霊安らかなれと祈る気持ちに変わりはない。仕えるもの額づく方々両者の真摯で純粹な祈りは太い波動となり開かれたご本殿奥深くに届く。常にも増して御霊たちはご感応召されていることと信じる。私は逆の心境も日々体感する。

毎日の命日祭で御扉をお開け申し上げた時、日の刺さぬ外陣から冷えた空気が底を崩すように流れ出す。その感触は間近で接すれば冷気ではなくして霊気としか思えないほど厳かで心身に沁む。目に見えぬ気は大床を這いぎざはしを降り拜殿で頭を垂れるご遺族に達して、和まれていることだろう。今年も春季例大祭、開扉ののち無人の境内に御霊は当惑されたのではと案じながら御扉を閉じた。先の大戦が終結してから本年は七十五年を迎える。七十五年間実に長い年月が過ぎ去る。しかし、長いと同時に平和なこの時代のそのいしづえを身を賭して築いて下さった御霊たち。そのご命日や春秋二季例大祭の節目の日には追悼と感謝のお心を新たにさせていただきたいと願う。

節目を尊ぶ、人生は 旅

例年に比べ春の訪れを早く感じた今年。しかし、令和二年の桜はまるで春季例大祭の日を待っていたかのように長く咲き誇りました。おそらくは世の中のすみごを英霊たちに報告することを憚って、せめて絹布のような桜花で覆い隠そうとしたのかもしれない。一気に咲き誇ってひと思いに散りゆく潔い桜の花は、尊い命を捧げて国を守ってくださった英霊たちの美しい形見のようですが、今年は暖冬といわれ桜の開花も早いと思われるかもしれませんが、花の納めが例大祭に間に合い自然の営みや季節の綾の有り難さを心から感謝しました。社頭には時折吹く風に舞う桜の花びら。そして奉納される巫女が舞う浦安の舞に合わせるかのように霊璽簿奉安殿の奥から啼きはじめたウグイス。それは一瞬鳥肌の立つ言いようのない心震える思いがしました。英霊たちが今まさに此処でご感応されている様子がいかがかと感じた祭典になりました。

営みと崩壊の歴史。戦争であったり自然災害であったり、災いの原因がまさしく再来してしまっています。今年も桜の花は華やかさや可憐さ、そして散りゆくひとひらひとひらの花びらが英霊たちのもの言わぬ姿にも似て、潔くすべての人を慰める霊力を特に見せてくれたかのように強く感じました。各方面において新型コロナウイルスの影響でさまざまな催し物の中止が続いています。大分縣護國神社でも大勢のご参列を仰ぐ春季例大祭を今年は規模縮小をせざるを得ない状況になってしまい、誠に不本意なことでした。ご本殿にお鎮まりの英霊をはじめ毎年の大祭にお越しのご遺族の皆様方には大変心が痛む思いがしております。護國神社の百四十五年の歴史はじまって以来のこととなりました。まずは世情を鑑みこのような窮余の策を講じざるを得ない決断とさせていただきますことご理解いただき、心よりお詫び申し上げます。ご遺族や崇敬者のご参列をいただくことは叶いませんでしたが、春季例大祭当日はご本殿において常とま



たく変わることにない大祭を肅々と齎行いたしました。縮小された大祭になりましたが神職一同心を込めてご奉仕し、さらに人々を不安に駆り立てているコロナウイルスの早期鎮静と終息を願って齎行いたしました。ご参列の方々のお姿がないことに英霊たちもさぞかしお寂しいことであつたと思いますが、それほどに今が大変な状況であることにも驚かれ、ご遺族崇敬者の上には「健康や家内安全」のお陰をお授けくださるのではと思いたしました。この国難にも似た難儀を救ってくださることを思います。

人間は味わった苦しみを忘れると驕り高ぶり、人様や世の中を軽んじてしまいます。そのような緊張感のないまやかしにも似た平和な月日はそう長く続かないことを、これまでの歴史のなかで人間はその都度起こった不幸な出来事を通して学習を重ねていたはずですが。今回の新型コロナウイルスも中国から世界中へと感染が拡大され、アメリカとヨーロッパではパンデミックに陥ってしまいました。世界の国々のなかの一国が他国への無遠慮な進出と、ある意味身勝手さをまかり通していた国民性が引き起こした人災であると言えます。そして人間が行った過去のあらゆる負の事例を思い起こし、「神様は私たちの行いを常にご覧になっていたんだな」と改めて思い知らされています。

これまでの暮らしのなかで「当たり前」だと思いつ、何気に過ごしていた日々が、実はどれほど有り難くて幸いで貴重なことであつたか。小さい事柄をコツコツと積み重ねていく努力の賜物への感謝がどれほど大切なことであつたか。日本中、世界中で日々感染者数が増えていくニュースを見るたびに、自分たちが行ってきたさまざまなを顧みています。そして護國神社にお鎮まりの大神様に一日も一刻も早くこの新型コロナウイルスの感染が終息するよう日々祈願をしています。

間もなく迎える創建百四十五年を前に大分縣鎮護の社として、英霊たちの慰霊と県民の平和への祈りを篤く続ける大分縣護國神社です。



山歩紀

お許山 御許山 宮司 八坂秀史

明神系のその石鳥居は柱間が一間ほどなので高さは二メートルほどか。鳥居としては小ぶりだ。が、此方を睨む対の獅子、笠が苔むした石灯籠、樹々茂る斜面に点在する古めかしい石塔などとワンチームとなり、この先立ち入るなどたならぬ気配を漂わせる。「奥宮」と刻まれた神額をいただくこの鳥居から先は神奈備（かむなび）だ。



七二〇年に編纂された日本書紀の神代記・天安川誓約（ウケヒ）の段には、「日神（あまてらすおおみかみ）が生まれた三柱の女神を、葦原中国の宇佐嶋に天降らせた」との一文がある。三柱の女神とは多岐津姫命（たぎつひめのみこと）・市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）・多紀理姫命（たぎりひめのみこと）を指し、宇佐神宮の東南に坐します宇佐嶋つまりここ御許山（標高六四七メートル）に天降ったとする三女神降臨が伝承されている。八幡さまが現われる以前の古い神だ。今回宇佐のご遺族の勧めで御許山への山行となった。



宇佐の聖地に詣るべく本日のルートとなった。前のめりの気合の割には登山口から三十二分で大元神社に着いた。拝殿向こうには冒頭の鳥居が建ち神と人の居場所を厳しく分ける。あらためて参拝、山上の巨石にかしわ手四つは届いただろうか？

自宅から移動九十分。途中、同様に山頂に磐座をもつ米神山のふもと佐田京石の岩々から力をいただき正覚寺登山口から歩き始める。檜を見上げながら雲ヶ岳分岐となるお地藏さんまでの急坂に喘ぐ。ここからはほぼ平坦、眺望はきかないが北東に山香の山々西に八面山が見え隠れする。整備された山道を進み山香からの車道と合流すればほぼ大元神社の境内に到る。つまりは車種を絞れば楽ちん山行も可能なわけだ。

しかし宇佐神宮発祥の聖域に初めて参詣するのにどうしてお気楽な行程など選べようか。古くはわらじ履きの神職が修行を積んだ「おもと古道」はいずれまた訪ねるとして、先ずは少しでもこの足で



春の護國神社点描

2月3日 節分祭

十二支最初の干支、子年。そして新たな元号になって初めての節分祭は心なしか毎年とは異なっているような新鮮さがありました。入りきれないほどに埋め尽くされた拝殿最前列にはこの日、厄払いの正式参拝をされた袴姿の年男年女の晴れがましい方々が。そして祭典後の社頭では大勢の皆さんにご参加いただいた賑やかな豆まきになりました。

しかし節分祭を終えた直後から新型コロナウイルスが流行の兆しを現しはじめました。災いを払い除けることを攘災招福と言いますが、まさしく今年の節分祭は特にその意味が大きかったように思われます。

新たな年が明け、気持ちもリセットできた節分祭と翌日の立春。さて今年も無病息災、家内安全で一年を無事に過ごしましよと神聖な気持ちで迎えていた矢先の新型コロナウイルスによる災禍の拡大になってしまいました。その後三月に予定されていた「梅まつり」や「赤ちゃん泣き笑い相撲」の中止と、このたびの「春季例大祭」がまさかの規模縮小にまで追い込まれるとはゆめゆめ思わないうらい穏やかで平和を感じる賑わいのあつた節分祭のあの日が、今は非常に懐かしく、そして無事に斎行できる春日頃のお祭りの有り難さを再認識しています。皆さんがお元気に集えることがお祭りの原点であると、そしてそれが神様の大きなご神威であると改めて感じています。

笑顔があふれた二月三日の節分祭を思い返すたびに、多くの人々の命、また日本のお茶の間に半世紀にもわたって笑いを提供してくれた有名人の命まで奪ったコロナウイルスの早期終息とともに、初春をお祝した節分祭に年男年女として厄を払われた皆さんや当日の祭典や豆まきにご参加くださった元氣な皆さんとそのご家族の上にごどうか災難が訪れないようにと改めて心から祈るばかりです。



護國神社では毎朝変わることなく神様に神饌をお揃えしお日供祭のご奉仕を務めております。午前十一時からは命日祭が斎行されています。職員全員による朝のお勤めと宮司が斎主となって執り行われる毎日の命日祭。そしてさまざまな祭典。それは一年三百六十五日、変わることはない英霊たちへの鎮魂と日本の恒久平和の願い、そして大分県民とご遺族崇敬者の皆さんの平安を肅々と祈りすることが護國神社の大きな役目であると心得てご奉仕しています。たとえこのたびのコロナウイルス拡大による外出自粛であつても、神職は神様のおそばにお仕えし、世の中の平和を祈念する使命があるのです。

日々の静寂なご奉仕のなかで聞こえてくるのは季節ごとによってくる野鳥のさえずり、そしてご本殿を囲んでいる深い森の木々が四季の変化に呼応するかのような息吹。それは香りであつたり風にそよぐ葉の音であつたり。雨に濡れる姿であつたり。まさに世の中の禍事を一切遮ってくれるかのような自然の豊かな恵みと自然がもたらす人智を超えた大きなパワーを五感で感じられます。

私たち神職の仕事は神様への祈りとご奉仕に加えて、神様と皆さんとの中取り持ちのお役目であると心得ています。私たち神職を通してどうかここ松葉山のお社におわします英霊たちの御心を感じただければと思います。

そのほかの祭典・行事

- 二月十一日 紀元節
- 二月十七日 祈年祭
- 二月二十三日 天長祭
- 三月二十日 春季皇霊祭遥拜式 春分祭



今回はちよっとタメになる、使うと「この人は分かってる」と神社からもしかしたら一目置かれるかもしれない知識を紹介致します。

受験の時、病気の時、良くない事が続いた時、皆さんは神社に何を求め向かわれますでしょうか。祈願を受けられる方もいらっしゃると思いますが、大抵の方はお守りやお札を求められるのではないかと思います。その際、皆さんは何と表現をされているでしょうか。多くの方は「買う」と表現されていると思われまます。神社にとって、取り扱いを気を付けてい

るのがこのお守りとお札です。

といますのが、お守りとお札は神様の力を頂いたもの、頒けたものでありますので、神様であるといっても差し障りのないものだからです。ですので、神社では「売る」ではなく、「授与」と表現しておりますし、「商品」ではなく、「頒布品」と表現しております。若し、今後神社でお守りやお札を求められる際は「受ける」、「お頒かち頂く」と表現をされてみては如何でしょうか。

皆さんの最も身近にいる神様が守りやお札です。文字通り、いつも皆さんを「お守り」してくださっている存在です。今回はそんなお守りとお札に焦点を当てて徒然なるままに書き記しました。どうでしょうか。少しお守りとお札に対する意識が変わりましたでしょうか。一人でも多くの方に知識を深めて頂き、気持ち豊かになって頂けたら幸いです。

お祭りや季節の行事の時に見かけた方もいらっしゃるはず。元号も令和に替わりましたが、昭和から平成、そして令和と、数人は御代三代にわたってご奉仕くださっている神社にとっても大切な皆さんを紹介しましょう。

境内整備技師の三名は広大な神苑の管理や自然林人工林が混在している樹木の管理、そして春秋の例大祭や夏越、師走の大祓など祭典行事の準備の采配を事細かに行ってくださっています。目につかないことやそれぞれの場所を毎日変わることなく見守り、そして大分市内では希有の豊かな自然を擁する神社の森の成長の手助けをしてくださっています。

今を大切に…。それは護國神社を次代の大分県人に心やすく受け継いでもらいたい春夏秋冬変わることをない縁の下の力持ちのお仕事をなさっています。



大切な人たち

いつもにこやかな笑顔のご婦人たちが七草粥や小豆粥のお振る舞いや夏から始まる豊後梅の仕込み、出来上がった梅干しを参拝者にお授けする福梅として丁寧に梅仕事を続けてくださっています。職員のお昼の用意や祭典行事の折には、大忙しのバックヤードで事細かな作業を長年お手伝いいただいています。

一朝一夕では身につかない神社ならではの数々の大切なしきたりを長年の豊かな経験のなかで重んじ、それを日々裏方として「神社の表」をサポートしてくださっています。

神社にとって大切な皆さんは英霊たちが心安らかに眠りいただける神社として、そして参拝者が気持ちよくお参りできる神社として「何をどのようにしたらいいのか」を熟知された心強い方たちばかりと言えます。

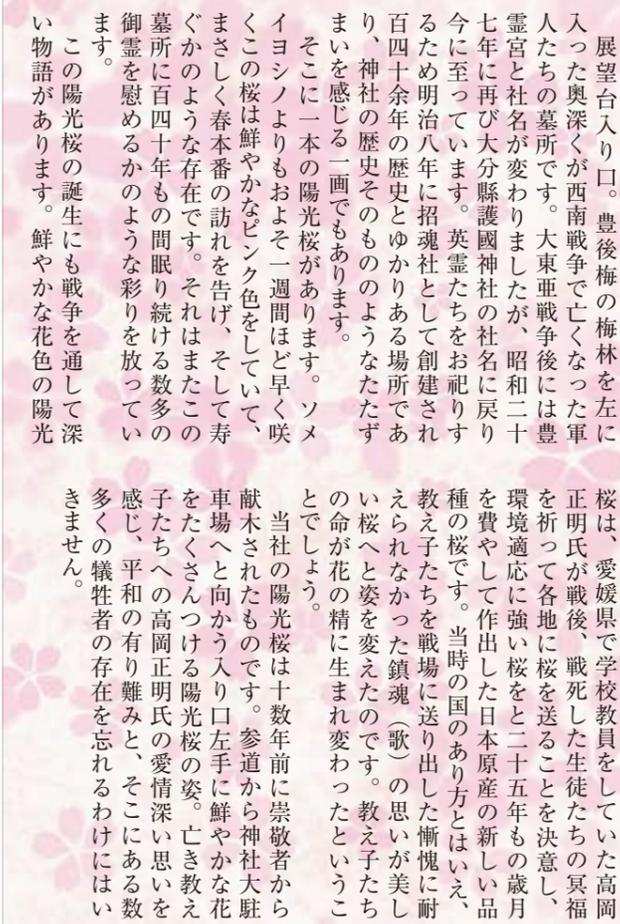
展望台入り口。豊後梅の梅林を左に入った奥深くが西南戦争で亡くなった軍人たちの墓所です。大東亜戦争後には豊靈宮と社名が変わりましたが、昭和二十七年に再び大分縣護國神社の社名に戻り今に至っています。英霊たちをお祀りするため明治八年に招魂社として創建され百四十余年の歴史とゆかりある場所であり、神社の歴史そのものようなたたずまいを感じる一画でもあります。

そこに一本の陽光桜があります。ソメイヨシノよりもおよそ一週間ほど早く咲くこの桜は鮮やかなピンク色をしていて、まさしく春本番の訪れを告げ、そして寿ぐかのような存在です。それはまたこの墓所に百四十年もの間眠り続ける数多の御霊を慰めるかのような彩りを放っています。

この陽光桜の誕生にも戦争を通して深い物語があります。鮮やかな花色の陽光

桜は、愛媛県で学校教員をしていた高岡正明氏が戦後、戦死した生徒たちの冥福を祈って各地に桜を送ることを決意し、環境適応に強い桜をと二十五年もの歳月を費やして作出した日本原産の新しい品種の桜です。当時の国のあり方とはいえず、教え子たちを戦場に送り出した慚愧に耐えられなかった鎮魂(歌)の思いが美しい桜へと姿を変えたのです。教え子たちの命が花の精に生まれ変わったということでしょう。

当社の陽光桜は十数年前に崇敬者から献木されたものです。参道から神社大駐車場へと向かう入り口左手に鮮やかな花をたくさんつける陽光桜の姿。亡き教え子たちへの高岡正明氏の愛情深い思いを感じ、平和の有り難みと、そこにある数多くの犠牲者の存在を忘れるわけにはいきません。



大きくなったね



偶然が重なると奇跡と名を変えてしまうのでしょうか。神苑に咲き誇る桜を撮影中の四月朔日のこと。もうかれこれひと昔の時を経て奇跡のような再会がありました。

今春、大分市内の中学校入学を控えている吉岡祐人君。入学を前にご家族と就学報告にいらしていただきました。十一年前の晩秋の夕方、お母さんと二の鳥居そばでドングリ拾いに来ていたのが二歳の時でした。一心に一粒一粒を拾い集めていた幼子が見違えるくらいに大きく成長していましたが、幼い頃の面差しがところどころに残っていて、一気に私のこの十一年という年月まで遡る思いがしました。



「若者の紛れもない立派な成長ぶりに比べて、はて、私のこの十年あまりはどうだったのだろうか」と。よしなしことを思い煩う原因になります。「いやいや詮無いこと。考えまい」

感受性豊かにして繊細な心を持つ小学生の時に平成から令和への感動の御代替わりを体験できたことは人生の素晴らしい思い出になることだと思います。そして日本の次代を担う若者として心どこかに何かしらの夢や希望や心意気の灯りが灯ったのではないのでしょうか。彼の芯のしっかりした受け答えと涼やかな眼差しに未来の日本を託す身として安堵の思いがしました。若者一人ひとりが彼のようにあつてくれたならば日本は大丈夫だと。

吉岡祐人君には英霊たちが叶えることができなかつた未来への大きな夢や希望を抱いて自分が立てた目標に向かって日々頑張ってもらいたい。それが何よりの親孝行になると信じています。そしてそれぞれの場面で感動が重なる「青春」を存分に享受してもらいたいと願わずにはおられません。

令和になって初めての桜の時に心がほぐれたようなあなたかな再会をご神威というのでしょうか。それとも満目の桜の優しい磁力に引き寄せられたご縁でしょうか。

護國神社にお鎮まりの大神様が吉岡祐人君の門出を嘉してくださいることを思います。